

佐々木邦全集

佐々木邦全集

第八卷





佐々木邦全集 8

夫婦百面相 美人自叙伝
夫婦者と独身者 文化村の喜劇

昭和五十年五月二十日 第一刷

著者 佐々木邦

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一 (大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©佐々木孝雄 一九七五年

目次

夫婦百面相 5

美人自叙伝 101

夫婦者と独身者 221

文化村の喜劇 349

解説・岡保生 398

夫
婦
百
面
相

店子と家主

岡本君は警句が祟^{たた}った。最初、細君に舞踏場^{ダンス・ホール}のことを話していた。友達に誘われて二三回覗いたのである。

「あなたも踊って？」

と細君が訊いた。

「無論さ」

と岡本君は答えたが、実はそんな柄でない。世帯染みた細君に対する反感が一寸手伝って、大きく出たのだった。

「何んな人？ 相手は」

「綺麗だったよ」

「素人？ 玄人？」

「玄人さ」

「芸者？」

と、菊代さんは貞淑^{ていしゆく}な細君だから、舞踏場のことなどは知らない。

「ダンサーだよ」

と岡本君は慳^{けん}食に言った。

「ダンサーは分っていますけれど」

「ダンサーはダンサーさ。芸者なんか来ないよ」

「然^もうでございますか。私は又芸者にもダンサーがあるの

かと存じました」

「芸者は芸者さ。ダンサーは芸者よりもっとモダンで気が利いている」

「舞子^{まいこ}ってのがあるじゃございませんか？ 芸者にも」

「あんなものとは違うよ。お前と話をしていると詰まらない。トンチンカンなことばかり言っている」

「それは私、家にばかりいて、外のことを知らないんですもの」

「それなら黙っていなさい」

「……………」

「悉^{すべ}皆世帯染みてしまったよ、お前は」

「子供に縛^{くわ}られているんですもの、仕方ありませんわ」

と菊代さんは、現に一番小^{ちい}さいのに乳房^{ちちう}を含ませながら、お相手をしている。

「無精になったよ」

「そんな積りはございませんけれどもね」

「髪^{かみ}だって碌々^{ろくろく}結^{むす}わないことがあるじゃないか？」

「……………」

「子供々々^{こどもども}といつて、努力をしないからさ。余所^{よそ}の奥さん達は違うぜ」

「然^さうでございますようかね」

「家に燻^{くすぶ}っているのばかりが女房の能^{あた}じゃない。些^ちつと世間を見ると宜^{よろ}いんだ。話相手も碌々^{ろくろく}出来ないじゃないか？」

と岡本君は不機嫌だった。

「それじゃ私もお供致^{ともぞ}しましょうか？」

「何処^{どこ}へ？」

「そのダンスのお師匠さんのところへ」

「お師匠さん？」

「え」

「長唄や清元じゃあるまいし」

「この通り分らないんですから、一遍拝見させて戴く必要がございますわ」

と菊代さんは淋しい笑顔を作った。お嫁に来てから六年、子供ばかり生んでいる中に、多少時世に後れたことは承知している。

「よせ／＼、お前なんか駄目だよ」

「何故でございますか？」

「連れて行っても仕方がない」

「お邪魔？」

「うむ。邪魔だ」

「……………」

「舞踏場へは美人が一杯来ている」

「……………」

「料理店へサンドウィッチを持って行くようなものだよ」

と、これが岡本君の警句だった。

「あなた」

「何だい？」

「好い加減に人を馬鹿になさいませ」

と菊代さんが敦固いた時、膝の上の赤ちゃんが泣き出した。

「子供は何うする？ 子供は」

「……………」

「舞踏場へ子供なんか連れて来るものはないよ」

「背負って参りますよ」

「馬鹿！」

と一喝して、岡本君は書斎へ引き揚げた。そこは客間兼帯で、椅子が三つ置いてある。その一つに腰を下した岡本君は頰杖をついて考え込んだ。寒い。石油ストーヴに火をつけようと思ったが、生憎マッチがなかった。茶の間へ行ったら、細君はもう奥の間へ入って、子供を寝せつけていた。

「マッチがない」

と言ったが、直ぐに見つかったので、

「あった／＼」

と訂正して、引き返して来た。ストーヴを点して煙草に火をつけたが、何うも落ちつかない。お隣りの田淵さんを訪れようかと考えた。しかし間もなく茶の間の時計が八時を報じたので諦めた。そこへ菊代さんが入って来た。羽織を着替えている。

「何うしたんだい？」

「私、これから田淵さんへ上って参ります」

「何の用だい？ 今頃」

「むしゃくしゃして仕方ありませんから、奥さんと世間話をして、気を晴らして参ります」

と菊代さんは胸に手を当てた。

「晚いよ、もう」

「まだ八時でございます」

「お前が行った後で、子供が目を覚ますと困る」

「稀には子供のお守ぐらいして下すっても宜いじゃないませんか？」

「厭だよ」

「何故でございますか？」

「おれはもう、おれの勤めをして来た。主人は外、妻は家の内と分担が定まっている」

「それじゃ唯今のは大分お言葉が違いますわ」

「菊代。お前は何か誤解しているんだね」

と岡本君は怖い顔をした。いつもの通り、圧迫してしまふ積りだった。

「誤解しようもございせんわ。明白に馬鹿だと仰有ったんですもの」

「それは問題が違ふ」

「家に燻っているのが能じやないと仰有ったじゃありませんか？」

「そんなことは何うでも宜い。まあ、そこへ掛けなさい」

「宜いことはございせんよ。私、行つて参ります」

と菊代さんは受けつけない。

「いけないよ。お前はおれが少し何か言うと、直ぐに田淵さんへ行つて喋る」

「あなただって、この間の晩、私が口答えをしたから不愉快だと仰有つて、十一時頃まで何処かへ行つていらしたじゃございせんか？」

「男と女とは違ふ」

「そんな勝手なことは通りませんよ」

「お前はおれが田淵さんを怖がっていると思うのかい？」

田淵さんは重役でも課長でもない。おれと同じ平社員だ」

「そんなことは何うでも構いませんわ。私、奥さんの外に申上げるところがないんですもの」

「主人の悪口を言つて、心持が好いのかい？」

「道理を聞いて戴くんです」

「左近君や中村君のところと一緒の積りでいちゃ困る。おれ達は田淵さんに仲人をして貰ったんじゃない」

「それは分つていますよ」

「まあ、掛けなさい。今夜はおれが少し言い過ぎたかも知れない」

と岡本君は細君の断乎とした態度に辟易して、改めて下から出ることに定めた。

「そんなら私、あなたに申上げましょう」

と菊代さんは漸く腰を下した。

「然うしなさい。夜まで喋つて歩くには及ばない」

「……………」

「何か文句があるのかい？」

「ございすとも」

「言つて御覧。遠慮は要らない」

「私、あなたの態度が悉皆變つてしまったと思うと、悲しくなりますわ」

「おれは別に変つたとも思っていないがね」

「變りましたよ。私に同情つてことが些つともありません。何でも直ぐに剣突を食わせるじゃございせんか？」

「それはお前が先刻見たいに分らないことを言うからさ」

「いゝえ、以前は私が間違つたことを申しても、穩かに教えて下さいました」

「然うでもなかったらう。おれは元來氣が短いんだから」

「それじゃ以前は猫を被つていらつしたんですか？」

「さあ、多少その傾向があつたかも知れない」

「兎に角、結婚後少し変りましたわ。民子たみこが生れてから大分変りましたわ。三人になってから、悉皆しつがい変ってしまいましたわ。三段に変わっていますわ」

「然うかね」

「私、お目にかゝったばかりの頃は、あなたがこんなに邪じや慳けんな物の言い方をなさる人とは思いませんでしたよ」

「それは結婚前だもの。嫌われると困るから、遠慮があったのさ。正直の話だ」

「あなたは何と仰有ったか覚えていらっしゃいますか？」

「いつのことだい？」

「あの時のことよ」

「あの時って？」

「私に申込んだ時よ」

「そんな古いことは何うでも宜い」

と岡本君は顔を燈ともめた。ロマンスつきで無暗に御機嫌を取っているから、昔の話を持ち出されると、頭が上らない。

「宜かございませんよ。私、順序として申し上げます」

「おれはもう悉皆忘れてしまった」

「それなら尚お申上げますわ。最初あなたは『菊代さん、お憤りになっちゃ困りますよ』と仰有いましたね」

「さあ」

「私が、『何あに？』って訊きますと、あなたは、『菊代さん、あなたは……菊代さん、あなたは』って吃くもりましたのよ」

「ふうん」

「それから、『私の孫の』って仰有いました」

「言った」

「こゝで一番初めから又やり直してございましたわ。『菊代さん、あなたは私の孫のお祖母さんになってくださいませんか？』って」

「能く覚えていやがるね」

「私、意味を考えて見てから、ハッとしましたわ。あなたの孫のお祖母さんなら、あなたの奥さんですもの」

「婉曲わんきよくに言ったんだ」

「私が黙ってしまったら、あなたは慌てましたわね。『菊代さん、冗談ですよ。菊代さん、御免下さい』って」

「……………」

「春でしたけれど、丁度こんな寒い晩でしたわね」

「……………」

「ねえ、あなた」

「然うだったろう」

「私、口では言わないで火鉢の灰に字を書いていましたの。あなたは慌てゝしまつて、それが分らないんですもの。震えていなさいましたわ」

「もう好い加減にしておくれ」

「その中に、あなたの手と私の手が火鉢の上で触ったでしょう。あなたは私の手を握って、押し戴いたじやありませんか？」

「もう堪忍しておくれ」

「いゝえ、私、申上げる丈けのことは申上げますよ。田淵さんへ上る代りですもの」

と菊代さんは用捨ようしゃない。

「お前の心持はもう分っている。要するに、その当時ほど

大切にしてくれないと言うんだろう？」

「然うでございますよ。その晩私がお玄関まで送って上げた時、あなたは、御門の潜りのところで振り返って、手を合せて、私をお拜みになったじゃありませんか？」

「あれはその時の心持を現したのだ。何もお前を神さまと思っただけじゃない」

「もう一遍、その時のお心持に戻って下さいませ。私はその時と些々とも変っていませんよ」

「おれも精神に於ては變ってはいない」

「それじゃ何に於て變っていますの？」

「さあ」

「それ御覧なさい」

「年を取ったんだ。子供がある。もうそんな甘ったるいことを言っちゃいけない」

「子供がありますから、特別に同情して戴きたいんですがいます。何処へも出られないじゃありませんか？」

「それも分っているよ」

「世間を見ろなんて仰有っても、御無理でございますわ」

「もう一級上ったら女中を置いてやる。まあ／＼辛抱しておくれ」

「私、あなたが優しくして下さい、働くのなんか何でもございせんものよ」

「分っている。これでも肚の中じゃ感謝しているんだ」

「何うでございましょうか？」

「本当だよ。つい我儘が出るんだ」

「然う仰有って戴くと、私も気が晴れますわ」

「機嫌を直して、お茶でも入れてお出」

「彼方へいらっしゃいよ」

「よし」

と岡本君は悉皆折れた。急所を握られているから敵わない。それに昔のことを言われると、菊代さんに対する愛情が新たになる。つい調子づいて、茶の間へ行く途中、菊代さんの手を取った。

「厭よ」

と菊代さんは先刻からの行きがかり上、厳しく刎ね返けた。

「宜いじゃあないか？」

「何うせ私なんかサンドウィッチでございますからね」

「あれは冗談だ」

「私、あれ丈けは左近さんや中村さんの奥さんに吹聴して上げますわ」

「あの辺は恐らく適評だろう」

「まあ、お口の悪い」

「此方とはダンチだ」

「はあ？」

「段違いさ」

「まあ！ オホ、々、々」

「本当だよ」

「そんなに急にお世辭を使っても駄目よ」

「然うキチンとしていけると、矢っ張り昔の面影がある。連も三人のお母さんとは見えないよ。ヘッヘ、」

と岡本君、からダラシがない。怖い顔をして、後が直ぐこの通りだから侮られる。

「時々はお話もお薬になりますわね」

と菊代さんは手加減が分っている。

「しかし頻繁だと中毒する」

「本当にもう一遍、あの頃のようになりとうございますわ」

「精々努力するさ、お互に」

「新婚旅行で宿屋へ着いた時……」

「もう宜いよ」

「オホ、、、」

「それは然うと、お前はそんな馬鹿な話を田淵さんの奥さんにしやしまいね？」

「はあ」

「大丈夫だろうね？」

「さあ」

「え？」

「少し申上げましたのよ、この間」

「呆れた奴だな」

と岡本君は、また癖が出た。

「でも奥さんが、左近さんや中村さんの新婚当時のことをお話しになって、種々とお訊きになるんですもの。私だって、あなたから叱られてばかりいるようなことは申上げられませんわ」

「何を喋ったんだい？」

「何ってこともございせんけれど、お昼からいらしって夕方まで、お動きになりませんでしたから」

「先刻の拜んだ話は？」

「申上げましたわ」

「孫のお祖母さんは？」

「あれも」

と菊代さんは子供に縛られながらも大いに活躍している。

お隣りの田淵さんというのは同僚で家主だ。もう五十を越しているから、岡本君^{あた}からは可なりの先輩になる。毎年整理の噂に結びつく人だが、不思議なことに決して首にならない。無任所で課長俸を喰^はんでいる。

「我輩は大丈夫さ。老朽も我輩ぐらい徹底すると、好い加減な敏腕家よりも安全だよ」

と当人も平気だ。

「我輩は二十五年だよ。我輩をやめさせて見給え。会社は五万円からの退職手当を右から左に出さなければならぬ。幹部も考えているよ。計算して見たら、五万円の金利が丁度我輩の年俸に当たっている。我輩は俸給自弁で勤めているんだ。それを切ったんじゃ会社が損をする」

という説明だった。一応首肯^{しゅくう}出来る。田淵さんは、この通り会社の方が保証つきの上に、家に家作^{かそう}がある。二人の娘が片附いてしまつて、もう何も苦勞^{くろう}がない。福德円満だ。それで円満居士という結名^{むすなな}がついている。道業は仲人と普請^{ふしん}。もつて建設的の性格が察しられる。好人物で世話好きだ。睨^{にら}みが利かない代りに、憎まれない。同僚の受けが頗る好い。

「岡本君、何うだね？一軒明いたから越して来ないか？」
とこの夏の円満居士が切り出した。岡本君は丁度探していたところだったから、

「何うぞ願います」

「今日見に来給え」

「お供致しましょう」

ということになった。気の早い男だから拝見すると直ぐに、

「これは結構です。是非お願い致します」

と決心がついた。しかし田淵さんは、

「いゝえ。いけません」

と首を振った。

「何故ですか？」

「家ってものは主人には分りません。一度奥さんに見て戴きましょう」

「妻は私の言いなりです」

「それがいけません。家ってものは目のある人が見ないと分りません」

「恐れ入りましたな。それじゃ日曜に妻をつれて参りましょう」

「然うしてください。奥さんに見て戴かないと、私の家作の真価は分りません」

「信用がないんですな」

と岡本君は頭を掻いた。

「君、あれは君の褒め方が足りなかったんだよ」

と一緒に検分した左近君が後から教えてくれた。

「はゝあ」

「大将、普請が自慢だからね。あんなことじゃ気に入らないんだよ」

「むずかしいんだね」

「その代り巧く褒めて見給え。二割や三割は直ぐに負ける」

「これは好いことを聞いた。妻をつれて来て、大いに褒めさせる」

と岡本君はその通りを実行して、間もなく田淵さんの店子になった。

円満居士は七軒の家作を持っている。猫額の地所に細かな貯財でやる道楽仕事だから、皆極く手頃だ。しかし性の知れない人間には決して貸さない。同僚では左近君と中村君が住んでいる。二人とも仲人をして貰った間柄だから、間違ない。そこへ岡本君が移って行つたのだから、居士共に四軒から同じ会社へ通う。同僚は、

「こゝへ来ると社宅のような気がする」

と言う。

「時に社宅らしい不便があるよ。僕の家で秋刀魚を焼くと中村君の家へ知れてしまう」

と左近君もそれを認めている。他の店子四名は、夫れ勤め先が違ふけれど、矢張り居士夫婦に媒妁して貰つたのが二組ある。

「何うだね？ 円満かね？」

と居士は後々まで面倒を見る。夫婦喧嘩が起ると細君連中は、

「奥さん、まあ、お聴き下さいませ」

と田淵夫人のところへ駆込み訴えをするのが例になっている。岡本家の菊代さんが奥さんのところへ気晴らしに行くと言い出したのは、移転後半歳、既に居士の家作の伝統に同化されたのだった。

幻滅の今日この頃

その昔、岡本君は菊代さんの御機嫌を取りに通った頃、実に努めたものだった。

「何うです？ 兄さんからお便りがありましたか？」

と岡本君は毎度訊いた。兄貴が大学の同級生だったので交際が始まったのである。その兄貴に用があるなら、直接上海へ手紙を出せば宜いのに、然うはしない。日曜毎に安否を尋ねに行つて、お父さんお母さんには無論のこと、菊代さんの妹や弟にまで取り入った。

「今日は岡本さんは何を持っていらちしやるでしょう？」

「僕、ピストルの約束だ」

「あら、狡いわ。買って戴いちやあいけないのよ」

「でも買って下さるんですもの」

「私、姉さんに言いつけて上げるわ」

「でも姉さんとお話している時仰有ったんです」

「然う？ それなら宜いでしょ」

「ピストルとチョコレート」

「西洋菓子よ、今日は」

「いゝえ。チョコレートよ。姉さんが好きだから」

「いゝえ。チョコレートはもう三度続いていますよ」

と妹さんと弟さんが賭をして待っているくらいだった。

間もなく上海の兄さんのところへ、お父さんから問合せが行った。……此頃岡本君、其許在京^{そのもとにきやう}当時にも弥勝^{いやまさ}りて毎日曜の如くに御来訪、御親切かけ被下、菊代も欲び迎うる

の風有^{ふうあり}之候^{ころう}が、貴慮^{いかが}如何のものに御座候哉云々。これに對して直ぐに返事が来た。……岡本君は学業優等とまで参らず候が、三年間中の上位を下らず、先ずもって秀才、品行方正、この点は請合にて、寧ろ石橋を叩き過ぎる程の堅人に御座候間云々。同時に岡本君も上海から一書を受取った。

「……度々僕の安否をお尋ね下さるそうで有難い。父から詳しく言つて来たので、略々見当がついた。君、本氣かい？ あんなものでもお氣に召したら将来面倒を見てやつて貰いたい。しかし我儘だぜ。この点は予め断つて置く。但しこれが妹を思う兄の早合点だったら大笑いだ。君から直接承わった上、僕の意向を両親へ通じたい。返事をくれ給え。些^ちつとも手紙をくれないで家へばかり安否を尋ねに来る以上は、これぐらいの嫌疑がかゝつても仕方があるまい。云々」

と大事を取つて、冗談交りの探りだった。岡本君は早速返事を認めて、胸中有りつ丈^{だけ}を披露^{ひやう}した後、

「万事賢兄の御尽力に俟^{まち}つ。僕は両手を合せて遙かに上海の方を拜んでいる」

と結んだ。うっかりしたことを書くものじゃない。この手紙は上海から父親の手へ廻つて来て、母親一覽の上、菊代さんも拝見した。

「拜むぐらいなら屹度大事にして下さいますわ」

とお母さんも進んでいた。

「厭な方ね。オホ、」

と菊代さんは裏腹を言つた。当時岡本君は何かというと呼び癖があつたと見える。その後菊代さんから直接承諾を

得て、感激の余り拝んだことが、現にこの間夫婦喧嘩の折、昔をお忘れにならないようにという意味で引き合いに持ち出されている。

婚約から結婚まで半年からの期間があった。岡本君は程度を知らない。もう大丈夫なのに、求婚時代同様な入れた。多少逆上の気味だった。一家簪族は素よりのこと、菊代さんの飼っていた猫の御機嫌まで取ったのである。

「実に可愛いものですな」

と或晩岡本君が猫を抱き取って頬ずりをした時、菊代さん

は、

「厭よ、私」

と故障を申立てた。

「はあ？」

「私、厭よ。もう」

「何うなさいましたか？」

「私、あなたが嫌になりました」

「何故ですか？」

「愛情が安価ですもの。頼もしくないわ。猫にも然うなら

他の人にも屹度然うに定まっていますわ」

「そんなことはありませんよ」

「いゝえ」

「他の人は別扱いです」

「それじゃ私は玉と同じ？ 猫と同格扱い？」

「いや、決して然ういう意味じゃありませんけれども」

と岡本君、詰まらないところで理詰めに会って、而も恐

慌がっていた。

その頃は夜晩くまで話し込んだ。菊代さんは甘やかされ

るのが嬉しくて引き止める。岡本君も残り惜しくて、終電車カッ／＼まで帰ろうとしない。以前はお母さんが氣をつけて、成るべくその場に居合す方針だったが、婚約後は反対の努力をするから、第三者は猫ばかりになった。尤もお父さんは一向考えない。氣が向けば、いつでも入って来る。或晩、二人の間へ割り込んで、貞淑論のお説法を始めた。

「何うですか？ 岡本君」

と一々同感を求めるから、

「成程。御道理です」

と岡本君はその都度相槌を打ちながら傾聴した。ナカナカ長い。

「要するに女は服従していれば宜い。智力に於て男に劣っています」

という三十年ばかり前の結論に達して、出て行くまでに

一時間余りかゝった。岡本君は漸く寛ぐと共に、

「結構な御教訓を承りましたね」

と口走った。

「知らない！」

と菊代さんは声を励した。服従論もさることながら、直

ぐに続けて、

「もう十時よ。あなたがいつまでもお相手をなさるから

よ」

と言った通り、時間が惜しかったのだった。

「しかし仕方がなかったのです」

と岡本君は菊代さんの親不孝が嬉しかった。少時して御機嫌を取り結んだところへ、お母さんがお茶を持って入っ

て来て又話し込んだ。岡本君は迷惑だったが、再び相槌の役を勤めなければならなかった。菊代さんは益々不平で欠伸をした。

「何ですわね。お行儀の悪い」

とお母さんが窘めた。岡本君はこゝぞとばかり、直ぐに弁護者の地位に立って、

「フランスの医者の説によりますと、女は欠伸をするほど頰の筋肉が発達して美人になるそうです」

とやった。

「本当？」

と菊代さんが笑った。

「えゝ。彼方の雑誌で見ました。しかし日本の女も本能的にこの学理を知っているようです」

「何故？」

「欠伸の出るような小説が能く売れるじゃありませんか？」

「まあ、皮肉ね。オホ、ゝゝゝ」

「ハッハゝゝゝ」

と岡本君、名譽回復の積りだった。

「けれども岡本さん、私、この間からあなたに申し上げたいと思つてゐることがございますのよ」

と菊代さんが開き直った。

「何ですか？」

「あなたはいつも女々って仰有いますわね」

「えゝ」

「私、婦人とか女性とかと仰有って戴きとうございますわ。女という言葉には何となく伝統的な侮蔑が罩つていま

すよ」

「成程。然うかも知れませんか。一口に女子供と申しますから」

「私、女と言う人は嫌いでございます。無意識の裡に横暴を告白しているのですから」

「これは気がつきませんでしたな。これからは御女性と申しましょう」

「御女性に変ね。態とらしいわよ」

「御婦人」

「それなら宜いわ」

「男は殿方ですか？」

「男は男で沢山じゃありませんか？」

「成程」

と岡本君は不首尾の折から、

「男は男だとか男の中の男だとかと、男そのもので既に数称になつてゐるようですね」

と御意を迎えた。

「それでですから私、不平よ」

「むずかしい人ね」

とお母さんは呆れて出て行つた。

斯ういうことを書き立てれば果しがない。当時は菊代さんの方が優勢の地位にいて見識が高かつたから、岡本君は一下下から出なければならなかった。

「成程。お説の通り、鳥でも獣でも、御婦人の方が男よりも羽毛なり毛皮なりが必ずお立派です」

といった具合に、決して逆わなかつた。それが結婚後間もなく手の平を返したようにアベコベになつたのだから、